

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	失語・高次脳機能障害学Ⅰ			担当講師	関理絵		
分 野	専門	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	基礎神経学の講義で学んだ神経的基礎を背景に、失語症・高次脳機能障害について学ぶ。器質的な脳疾患によって生ずるこれらの病態を把握し、その評価と類型別の訓練方法について履修する。また、言語障害患者や高次脳機能障害患者における心理面への影響と社会的な関係についても意識を高める。						
到達目標	1. 神経心理学について知る。 2. 神経言語学研究の歴史的背景を知る。 3. 言語と神経心理学についての解剖学的側面を知る。 4. 神経言語学に関する研究方法を知る。 5. 脳解剖、脳画像の基本的な読影ができる。 6. 言語中枢メカニズムとその障害を知る ①言語モデルとその障害を理解する 7. 言語中枢メカニズムとその障害を知る ②失語症の分類について理解する 8. 言語中枢メカニズムとその障害を知る ③言語中枢メカニズムとその関連障害を理解する 9. 言語中枢メカニズムとその障害を知る 10. 発達中の脳における言語メカニズム ①脳の成長について理解する 11. 発達中の脳における言語メカニズム ②脳の可塑性について理解する 12. 発達中の脳における言語メカニズム ③小児の言語障害について理解する 13. 脳損傷により生じる様々な高次脳機能障害の症状とその評価法を理解する。 14. 高次脳機能障害の多様性を理解する。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	言語神経学入門 なぜ神経学か？
2	言語神経学入門 神経コミュニケーション障害の研究における最近の功労者・歴史的背景
3	言語神経学入門 解剖学的位置づけ、研究の方法
4	脳部位・画像について
5	言語中枢メカニズムとその障害 言語モデルとその障害
6	言語中枢メカニズムとその障害 失語症の分類
7	言語中枢メカニズムとその障害 関連障害
8	発達中の脳における言語メカニズム 脳の成長、脳の可塑性
9	発達中の脳における言語メカニズム 小児の言語障害
10	失語症の検査①
11	失語症の検査②
12	失語症の評価①
13	失語症の評価②
14	失語症評価におけるまとめかた①
15	失語症評価におけるまとめかた②
16	高次脳機能障害とはなにか
17	全般的精神機能
18	注意機能
19	注意機能
20	記憶
21	記憶障害
22	行為

23	失行
24	空間性認知
25	半側空間無視
26	遂行機能
27	遂行機能障害
28	社会性認知
29	社会的行動障害
30	まとめ

評価方法	終講試験の点数(100%)に基づいて学修成果を判定する。 (失語症学50%、高次脳機能障害学50%)		
教科書	・標準言語聴覚障害学シリーズ ・標準言語聴覚障害学シリーズ	高次脳機能障害学 失語症学	医学書院 医学書院
参考書	言語聴覚士テキスト		
備考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。		

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	失語・高次脳機能障害学Ⅱ			担当講師	稲川良・根本皇太		
分 野	専門	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	基礎神経学の講義で学んだ神経的基礎を背景に、失語症・高次脳機能障害について学ぶ。器質的な脳疾患によって生ずるこれらの病態を把握し、その評価と類型別の訓練方法について履修する。また、言語障害患者や高次脳機能障害患者における心理面への影響と社会的な関係についても意識を高める。						
到達目標	・失語症 失語症とその障害の特長について説明できる ・失語症 失語症の特徴的な言語症状について説明できる ・失語症 失語症の分類について説明できる・症状に基づいた失語症の分類ができる ・失語症の近縁の特殊な障害 ①発語失行について説明できる ・失語症の近縁の特殊な障害 ②失読症・失書症について説明できる ・失語症の近縁の特殊な障害 ③純粋語聾・聴覚失認について説明できる ・失語症の近縁の特殊な障害 ④半球離断症候群について説明できる ・失語症の原因となる脳の病気 ①脳卒中について説明できる ・失語症の原因となる脳の病気 ②変性疾患について説明できる ・失語症の原因となる脳の病気 ③失認症について説明できる ・左半球の特性、右半球の特性を理解する。 ・高次脳機能障害者の問題を推測し、必要な検査を選択できる。 ・高次脳機能障害者の問題を推測し、実施した検査から評価（解釈）ができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	失語症 失語症とは：その障害の特長
2	失語症 その特徴的な言語症状
3	失語症 失語症の分類
4	失語症 失語症の分類
5	失語症の近縁の特殊な障害 発語失行
6	失語症の近縁の特殊な障害 失読症・失書症
7	失語症の近縁の特殊な障害 ・純粋語聾・聴覚失認
8	失語症の近縁の特殊な障害 半球離断症候群
9	失語症の改善に関わる要因 患者側の要因
10	失語症の改善に関わる要因 言語治療側の要因
11	失語症の言語治療テクニック 刺激・促進法
12	失語症の言語治療テクニック 機能再編成による方法
13	失語症の言語治療テクニック 認知神経心理学による方法
14	失語症の言語治療テクニック 実用コミュニケーションの促進法
15	STによる失語症言語治療の例 訓練を開始するにあたって／言語訓練の具体例
16	画像読影の基礎①
17	画像読影の基礎②
18	前頭葉症状
19	前頭葉症状
20	認知症
21	認知症
22	認知症
23	認知症

24	左半球損傷にともなう高次脳機能障害①
25	左半球損傷にともなう高次脳機能障害②
26	右半球損傷にともなう高次脳機能障害①
27	右半球損傷にともなう高次脳機能障害②
28	高次脳機能障害に対する検査演習
29	高次脳機能障害に対する検査演習
30	まとめ

評価方法	終講試験の点数(100%)に基づいて学修成果を判定する。 (失語症学50%、高次脳機能障害学50%)
教科書	言語聴覚士ドリルプラス 高次脳機能障害 診断と治療社 言語聴覚士ドリルプラス 失語症 診断と治療社
参考書	言語聴覚療法シリーズ3・4 高次脳機能障害 失語症
備考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	失語・高次脳機能障害学Ⅲ			担当講師	稲川良・田中眞一・高堀雅子		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	3 単位	時 間	90 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	言語聴覚士の臨床活動の中で「評価」を位置づけることができる。 検査の持つ意義を理解した上で、各々の検査が実施できる。 「失語・高次脳機能障害学Ⅰ・Ⅱ」の講義で学んだ知識をもとに、失語症の評価・診断ができ、症例に応じた治療・訓練・指導ができる。						
到達目標	1. 言語聴覚士の臨床活動を説明できる。 2. 失語症・高次脳機能障害のリハビリテーションの流れを説明できる。 3. インテーク面接やスクリーニング検査の意義を理解し、実施できる。 4. 標準失語症検査を実施し、その結果を解釈できる。 5. 掘り下げ検査の意義を理解し、実施できる。 6. 高次脳機能障害に応じた検査を選択し、実施できる。 7. 訓練の適応、訓練目標、訓練法の種類について概説できる。 8. ICFに準じて症例の全体像を整理し、訓練計画を立案することができる。 9. 患者・家族に対する説明と同意を適切に実施できる。 10. 訓練効果の仮説検証作業を行うことができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	古典分類・病巣・言語症状
2	古典分類・病巣・言語症状
3	認知神経心理学的アプローチ - 意味
4	認知神経心理学的アプローチ - 語彙
5	認知神経心理学的アプローチ - 音韻
6	統語構造分析と意味役割の同定
7	失文法および統語理解障害の階層性
8	小児失語
9	原発性進行性失語
10	交叉性失語
11	刺激法・遮断除去法・機能再編成法
12	語彙訓練、構文訓練
13	実用的コミュニケーション障害、参加制約・心理的問題へのアプローチ
14	問題点整理・目標設定・訓練計画立案
15	問題点整理・目標設定・訓練計画立案
16	訓練の実践
17	訓練の実践
18	訓練の実践
19	失語症臨床のまとめ
20	高次脳機能障害について復習①
21	高次脳機能障害について復習②
22	高次脳機能障害の背景症状
23	高次脳機能障害各論 全般
24	高次脳機能障害各論 注意障害①
25	高次脳機能障害各論 注意障害②

26	高次脳機能障害各論	記憶障害①
27	高次脳機能障害各論	記憶障害②
28	高次脳機能障害各論	失認①
29	高次脳機能障害各論	失認②
30	高次脳機能障害各論	視空間障害①
31	高次脳機能障害各論	視空間障害①
32	高次脳機能障害各論	失行①
33	高次脳機能障害各論	失行②
34	高次脳機能障害各論	前頭葉症状①
35	高次脳機能障害各論	前頭葉症状②
36	高次脳機能障害各論	注意障害の訓練
37	高次脳機能障害各論	記憶障害の訓練
38	高次脳機能障害各論	失認の訓練
39	高次脳機能障害各論	視空間障害の訓練
40	高次脳機能障害各論	失行の訓練
41	高次脳機能障害各論	前頭葉症状の訓練
42	高次脳機能障害の援助・指導	
43	高次脳機能障害の援助・指導	
44	高次脳機能障害の援助・指導	
45	まとめ	

評価方法	終講試験（100％）に基づき判定する	
教科書	標準言語聴覚障害学失語症学第2版．医学書院，東京，2015. 標準言語聴覚障害学高次脳機能障害学第2版．医学書院，東京，2015.	
参考書	講義資料を適宜配布する	
備考	予習復習を行うこと	

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	言語発達障害学Ⅰ			担当講師	石井汰樹、山神翔太		
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1単位	時間	30時間	学年	2年次	学期	前期
概要	言語発達障害に関する諸神経疾患と評価法、支援法について学ぶ。また、定型発達との対比により言語発達障害児の評価の方法・指導について学ぶ。						
到達目標	1. 神経発達障害について理解し、それぞれの疾患の特徴について説明できる。 2. 正常発達との対比により、障害の問題点に気づくことができる。 3. 言語発達障害児への様々な支援法について理解し、説明できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	小児の社会参加と支援
2	知的障害 1
3	知的障害 2
4	自閉スペクトラム症 1 ASDの理解
5	自閉スペクトラム症 2 概念・診断・特徴
6	自閉スペクトラム症 3 原因と評価
7	自閉スペクトラム症 4 支援アプローチ法
8	視覚的構造化演習 1
9	視覚的構造化演習 2
10	視覚的構造化演習 3
11	視覚的構造化演習 4
12	注意欠如・多動症 1
13	注意欠如・多動症 2
14	脳性麻痺 1 (山神)
15	脳性麻痺 2 (山神)

評価方法	終講試験70%、課題30%により学修成果を判定する。
教科書	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学(第3版) 医学書院
参考書	言語聴覚士のための基礎知識「小児科学・発達障害学」第3版 医学書院 ドリルプラス 言語発達生涯 診断と治療社
備考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。 随時課題を出すので、必ず提出すること。

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	言語発達障害学Ⅱ			担当講師	岡崎 宏、石井汰樹、奥泉大地		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	・ 言語発達障害に関する指導法、検査法、評価法について学ぶ。 ・ 定型発達との対比により言語発達障害児の特性について学ぶとともに、実際の症例について検討し、説明・報告する。						
到達目標	1. 言語発達障害へのアプローチ法について理解し、説明できる。 2. 代表的な心理検査法の理論と特徴について理解し、検査手続きを習得する。 3. 対象症例について評価法、問題点の抽出、訓練プログラムについて検討し、基礎的な訓練計画の立案や予後予測を行う中で、症例についての知識・理解を深めることができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	学習障害 1
2	学習障害 2
3	特異的言語発達障害 1
4	特異的言語発達障害 2
5	インリアル・アプローチ
6	ソーシャルスキル・トレーニング
7	小児の検査・評価法
8	検査法演習 質問紙法
9	検査法演習 発達検査法 1
10	検査法演習 発達検査法 2
11	検査法演習 WISCIV知能検査 1
12	検査法演習 WISCIV知能検査 2
13	検査法演習 WISCIV知能検査 3
14	検査法演習 WISCIV知能検査 3
15	検査法演習 田中ビネーV知能検査 1
16	検査法演習 田中ビネーV知能検査 2
17	検査法演習 絵画語い発達検査
18	検査法演習 LCスケール
19	検査法演習 代表的な心理検査法 1
20	検査法演習 代表的な心理検査法 2
21	検査法演習 代表的な心理検査法 3
22	検査法演習 代表的な心理検査法 4
23	検査法演習 代表的な心理検査法 5
24	検査法演習 代表的な心理検査法 6
25	症例分析・研究法 1
26	症例分析・研究法 2
27	症例分析・研究法 3
28	症例分析・研究法 4

29	症例分析・研究法 5
30	症例分析・研究法 6
評価方法	終講試験50%、演習課題50%により学修成果を判定する。
教科書	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学(第3版) 医学書院
参考書	言語聴覚士のための基礎知識「小児科学・発達障害学」第3版 医学書院 ドリルプラス言語発達障害 診断と治療社
備 考	グループワークを通して互いに協力し合い、主体的に深く学ぼうとする意欲を重視する。

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	言語発達障害学Ⅲ			担当講師	岡崎宏、奥泉大地		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	小児臨床における言語聴覚士のかかわりについて理解し、小児の評価、療育訓練、保護者への支援についての技術について学ぶ。						
到達目標	1. 医療機関における小児臨床の流れについて説明できる。 2. インテークシート等、臨床に必要な書類の作成ができる。 3. 各種検査について知り、施行ができる。 4. 各種療育訓練法について知り、訓練プログラムと教材の作成ができる。 5. 保護者に対して訓練の説明を行い同意を得るための、シミュレーションとロールプレイができる。 6. 医療カンファレンスの方法について知り、シミュレーションとロールプレイができる。 7. 臨床研究の手順を知り、簡単な発表ができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	オリエンテーション・症例の理解 1
2	オリエンテーション・症例の理解 2
3	インテーク演習 1
4	インテーク演習 2
5	インテーク演習 3
6	インテーク演習 4
7	インテーク演習 5
8	インテーク演習 6
9	カンファレンス演習 1
10	カンファレンス演習 2
11	カンファレンス演習 3
12	カンファレンス演習 4
13	リハビリテーション実施計画書の作成演習 1
14	リハビリテーション実施計画書の作成演習 2
15	リハビリテーション実施計画書の作成演習 3
16	リハビリテーション実施計画書の作成演習 4
17	リハビリテーション実施計画書の作成演習 5
18	リハビリテーション実施計画書の作成演習 6
19	説明と同意演習 1
20	説明と同意演習 2
21	説明と同意演習 3
22	説明と同意演習 4
23	説明と同意演習 5
24	説明と同意演習 6
25	症例報告書作成演習 1
26	症例報告書作成演習 2
27	症例報告書作成演習 3
28	症例報告書作成演習 4

29	症例報告書作成演習 5
30	症例報告書作成演習 6
評価方法	課題70%、終講試験30%により学修成績を評価する
教科書	・言語発達障害学 医学書院 ・言語聴覚療法技術ガイド 文光堂
参考書	小児リハビリテーション誌 2018年10月号 gene ドリルプラス 言語発達障害
備 考	患者や家族、保護者への説明と訓練・療育を行うための実際的なスキルを身に付けることを重視する 演習課題は評価対象であるので、必ず提出すること

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	発声発語障害学Ⅰ			担当講師	松本典之、田中眞一、齋藤翔太		
分 野	専門	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	3 単位	時 間	90 時間	学 年	2年次	学 期	前期・後期
概 要	神経疾患によるコミュニケーション障害障害の中に、運動障害性構音構音障害（dysarthria）を位置づける。 Dysarthriaの評価・診断・治療を行うために必要な、基本的知識を習得する。 Dysarthriaの評価・診断と結果の解釈ができ、治療・訓練・指導に活用する。 Dysarthriaの固有の問題に配慮した治療・訓練・指導の方法を習得する。 Dysarthriaと嚥下障害の関連性について考察する。 Dysarthriaや嚥下障害に対する、チーム医療について考察する。						
到達目標	1. 神経病変によるコミュニケーション障害の中で運動障害性構音障害を位置づけ説明できる。 2. 構音障害の種類（機能性・器質性・運動障害性）と発生機序を説明できる。 3. 構音障害（機能性・器質性・運動障害性）の原因・病態・症状を障害別に説明できる。 4. 発話に関与する呼吸器、喉頭、構音器官および神経系と機能について説明できる。 5. 発話に関与する呼吸器、喉頭、構音器官および神経系と運動障害性構音障害との関係について説明できる。 6. 運動障害性構音障害をきたす疾患について説明できる。 7. Dysarthriaと嚥下障害の関連性について概説できる。 8. 標準ディサースリア検査の概要を説明できる。 9. 標準ディサースリア検査（発話の検査）が実施できる。 10. 標準ディサースリア検査（発声発語器官の検査）が実施できる。 11. 標準ディサースリア検査（発声発語器官の検査、補助検査）が実施できる。 12. 標準ディサースリア検査の結果を解釈し、治療・訓練・指導へ活用できる。 13. Dysarthriaの治療について概説できる。 14. Dysarthriaの治療―話者主体のアプローチを実施できる。 15. Dysarthriaの治療―コミュニケーション主体のアプローチを説明できる。 16. Dysarthriaのタイプに応じた治療ができる。 17. Dysarthriaの評価・治療の流れを説明できる。 18. 医学的治療、チーム医療の方法が説明できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1, 2	コミュニケーションにおける発話の役割
3, 4	運動障害性構音障害（Dysarthria）の定義
5, 6	Dysarthriaの分類と特徴
7, 8	Dysarthriaをきたす疾患
9, 10	Dysarthriaの発話特徴
11, 12	Dysarthriaのタイプ別の重症度
13, 14	標準ディサースリア検査
15, 16	標準ディサースリア検査
17, 18	スピーチサンプルの聴き取り（症例）
19, 20	Dysarthriaの治療—話者主体のアプローチ
21, 22	Dysarthriaの治療—コミュニケーション主体のアプローチ
23	終講試験
24, 25	Dysarthriaの治療—話者主体のアプローチ
26, 27	Dysarthriaの治療—コミュニケーション主体のアプローチ
28, 29	Dysarthriaの治療—発声発語器官へのアプローチ
30, 31	Dysarthriaの訓練（実技）
32, 33	Dysarthriaの訓練（実技）
34, 35	Dysarthriaの訓練（実技）

36, 37	Dysarthriaの訓練（実技）
38, 39	Dysarthriaの訓練（実技）
40, 41	Dysarthriaの訓練（実技）
42, 43	Dysarthriaの訓練（実技）
44, 45	Dysarthriaの訓練（実技）
46	終講試験

評価方法	終講試験（100%）
教科書	・ ディサースリア臨床標準テキスト(第2版) 医歯薬出版 ・ 言語聴覚士ドリルプラス 運動障害性構音障害 診断と治療社
参考書	言語聴覚療法シリーズ9・14・16 運動性構音障害 音声障害 AAC
備考	

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	発声発語障害学Ⅱ			担当講師	稲川 良		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	本科目では、言語聴覚士が関わる発話障害である運動障害性構音障害、口腔腫瘍術後の構音障害、器質性・機能的構音障害、吃音について概説する。その後、発声発語器官の解剖・生理などの基本的事項から器質性構音障害における疾患、評価、治療（外科的治療、音声治療）について理解を深め、言語聴覚士としての役割を学ぶことを目標とする。						
到達目標	1. 言語聴覚士が関わる発話障害の種類・特徴を把握する。 2. 発声発語器官の解剖・生理を理解する。 3. 口唇・口蓋裂の問題点を理解する。 4. 口唇・口蓋裂に関わる専門治療科・職種とその役割、治療方針を理解する。 5. 口唇・口蓋裂を有する児の言語・構音発達について理解する。 6. 口唇・口蓋裂症例にみられる構音障害の評価の流れを理解する。 7. 口唇・口蓋裂症例にみられる構音障害の訓練方法を理解する。 8. 口腔腫瘍術後の構音障害、摂食嚥下障害の特徴を理解する。 9. 口腔腫瘍術後の構音障害、摂食・嚥下障害の検査・評価を理解する。 10. 口腔腫瘍術後の言語訓練・嚥下訓練を理解する。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	異常構音の特徴、診断上の留意点、聴き取り練習						
2	構音検査の目的・方法						
3	訓練の目的、適応、セッション構成例 構音訓練の適応						
4	聴覚的弁別訓練、音の産生訓練 系統的構音訓練						
5	音別訓練方法 声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の構音訓練						
6	音別訓練方法 口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の構音訓練						
7	その他の舌・口唇の形態異常と機能障害						
8	口腔腫瘍とその治療・臨床分類						
9	口腔腫瘍術後の構音障害の検査・評価①						
10	口腔腫瘍術後の構音障害の検査・評価②						
11	口腔腫瘍術後の構音訓練①						
12	口腔腫瘍術後の構音訓練②						
13	口腔腫瘍術後の発話補助手段						
14	口腔腫瘍術後の摂食嚥下訓練						
15	口腔腫瘍術後の心理・社会的問題						
評価方法	終講試験100%に基づいて学修成果を判定する						
教科書	言語聴覚士ドリルプラス 器質性構音障害 診断と治療社						
参考書							
備 考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	発声発語障害学Ⅲ			担当講師	稲川良		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	発達にともなう正常の構音の発達を学習し、誤学習としての機能性構音障害の評価・訓練を学ぶ。						
到達目標	1. 機能性構音障害の障害像を理解できる。 2. 構音検査を実施し、結果を解釈できる。 3. 症状に応じた構音訓練を選択し、実施できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	構音の発達・定義・分類
2	構音障害とは
3	日本語の音声学的特徴
4	誤り音の種類
5	構音障害の症状
6	声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の特徴・診断上の留意点
7	口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の特徴・診断上の留意点
8	異常構音の聞き取り
9	構音検査の目的・方法
10	訓練の目的、適応、セッション構成例
11	構音訓練の適応
12	系統的構音訓練①
13	系統的構音訓練②
14	音別訓練方法(声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の構音訓練)
15	音別訓練方法(口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の構音訓練)

評価方法	終講試験（50％）、課題レポート（50％）に基づいて学修成果を判定する。
教科書	言語聴覚士ドリルプラス 機能性構音障害 診断と治療社
参考書	
備 考	

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	発声発語障害学Ⅳ			担当講師	松本典之		
分野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	音声（発声）における解剖・生理などの基本的事項から、音声障害における疾患、評価、治療（外科的治療、音声治療など）などの事項について理解することができる。						
到達目標	1. 発声行動について、音声障害に関連付けて説明できる。 2. 発声の問題における疾患、各ライフステージ、職業などについてそれぞれ説明できる。 3. 音声障害を呈する種々の疾患・治療について説明できる。 4. 音声障害の全体の診療の流れを理解し、耳鼻咽喉科医などの他職種の診療を説明できる。 5. 音声障害における声の評価法について説明できる。GRBAS尺度についてのサンプルを聞き分けられる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	音声障害概論
2	発声の原理・メカニズム
3	発声の生理・解剖・神経
4	音声障害の病態・病因
5	音声障害の原因疾患①
6	音声障害の原因疾患②
7	音声障害の評価①（評価・診断の流れ）
8	音声障害の評価②（聴覚心理学的検査＜GRABAS尺度＞）
9	音声障害の評価③（音響分析・空気力学的検査）
10	音声障害の治療①（治療の原則）
11	音声障害の治療②（医科的対応・声の衛生指導）
12	音声障害の治療③（症状的対処の音声治療）
13	音声障害の治療④（包括的音声治療）
14	無喉頭音声①（気管切開・人工呼吸器）
15	無喉頭音声②（無喉頭音声の種類と訓練）

評価方法	終講試験（100％）
教科書	言語聴覚士ドリルプラス音声障害 診断と治療社
参考書	
備 考	

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	発声発語障害学Ⅴ			担当講師	飯田裕幸		
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2単位	時間	30時間	学年	3年次	学期	前期
概要	吃音の基礎知識を知ることができる。 吃音の評価・診断・治療を行うことができる。						
到達目標	1. 吃音の原因を理解する。 2. 吃音により生じる二次的障害を理解する。 3. 吃音診療の流れを理解する。 4. 吃音の評価方法を理解する。 5. 吃音の訓練・支援・指導を理解する。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	自己紹介、体験談など -まずは、当事者のことを知ろう -						
2	流暢性障害（吃音）の概念、分類、症状、心理						
3	吃音における歴史、吃音に関わるさまざまな理論						
4	診断・評価						
5	訓練・支援（直接法、間接法、その他の支援①）						
6	訓練・支援（直接法、間接法、その他の支援②）臨床的な視点から必要な知識（＋症例紹介）吃音臨床現場と地域の状況を知る						
7	個人での症例検討						
8	グループでの症例検討①						
9	グループでの症例検討①、発表						
10	グループでの症例検討②						
11	グループでの症例検討②、発表						
12	グループでの症例検討③						
13	グループでの症例検討③、発表						
14	国家試験対策 - 実際の問題を解いてみよう -						
15	国家試験対策、小試験						
評価方法	終講試験点数（100％）に基づき判定する						
教科書	適宜資料配布する						
参考書	なし						
備考	予習・復習を行うこと						

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	嚥下障害学Ⅰ			担当講師	染谷 明德		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	2年次	学 期	通年
概 要	摂食・嚥下障害の基礎知識から引き続き、評価・診断ができるよう理解できる。 固有の問題に配慮した治療・訓練・指導ができる。						
到達目標	1. 摂食・嚥下機能の発達について説明できる。 2. 老化と嚥下機能の低下について説明できる。 3. 摂食・嚥下に関するスクリーニング検査を説明できる。 4. 摂食・嚥下に関するスクリーニング検査を実施し、評価できる。 5. 摂食・嚥下機能の精密検査について説明できる。 6. ビデオ嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の評価の基礎を理解し説明できる。 7. 検査結果を統合して摂食・嚥下障害の診断・分類・重症度の判定が実施できる。 8. 外科的治療の基礎的な事項について説明できる。 9. 薬物療法の基礎的な事項について説明できる。 10. 間接的嚥下訓練を実施できる。 11. 直接的嚥下訓練を実施できる。 12. 摂食時の姿勢、飲食物の形態・粘性、一口量に配慮した訓練を説明、実施できる。 13. 摂食・嚥下障害と内科一般の関連性を理解し、摂食・嚥下リハビリテーションにおけるSTの役割を説明できる。 14. 経管栄養の分類・適応について説明できる。 15. 小児の摂食機能療法について説明できる。 16. NST（栄養サポートチーム）や介護予防事業の概要を理解し説明ができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	①摂食・嚥下障害の基礎知識の確認（概論の復習）
2	①摂食・嚥下障害の基礎知識の確認（概論の復習）
3	②摂食・嚥下障害のアセスメント
4	②摂食・嚥下障害のアセスメント
5	③スクリーニングテスト「反復唾液嚥下テスト」
6	③スクリーニングテスト「反復唾液嚥下テスト」
7	④スクリーニングテスト「改訂水飲みテスト、フードテスト」
8	④スクリーニングテスト「改訂水飲みテスト、フードテスト」
9	⑤摂食・嚥下障害に関わる内科一般の基礎
10	⑥摂食・嚥下障害の診察と検査 ・ ビデオ嚥下造影検査
11	⑦摂食・嚥下障害の診察と検査 ・ 嚥下内視鏡検査
12	⑧摂食嚥下機能評価「食事場面の評価①」
13	⑨摂食嚥下機能評価「食事場面の評価②」
14	⑩訓練実施におけるリスク管理
15	前期終講試験
16	発達障害による摂食・嚥下障害
17	発達障害による摂食・嚥下障害
18	NST・介護予防事業の概要
19	NST・介護予防事業の概要
20	症例検討①

21	症例検討①
22	症例検討②
23	症例検討②
24	症例検討③
25	症例検討③
26	摂食・嚥下障害における用語確認
27	摂食・嚥下障害における用語確認
28	摂食・嚥下障害における用語確認
29	摂食・嚥下障害における用語確認
30	後期終講試験

評価方法	終講試験100%に基づいて学修成果を判定する
教科書	・言語聴覚士ドリルプラス 摂食嚥下障害 診断と治療社 ・嚥下障害ポケットマニュアル 医歯薬出版
参考書	プリントを適宜配布
備考	プリントや症例DVDも供覧するので、しっかり習得するようにしましょう

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	嚥下障害学Ⅱ			担当講師	稲川良・松本典之		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	摂食嚥下障害学Ⅰで学習した内容を基礎とし、摂食嚥下機能を支える解剖・生理学的基盤、評価方法、訓練方法に関する知識を整理する。また、実践的な摂食嚥下リハビリテーションを学ぶ。						
到達目標	1. 摂食嚥下機能と5期モデルおよびプロセスモデルを理解する。 2. 摂食嚥下に関する検査・評価を理解し、実施できる。 3. 外科的治療の基礎を理解する。 4. 摂食嚥下訓練を実施できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	咀嚼・嚥下の基礎
2	嚥下の年齢的变化
3	摂食嚥下障害発症のメカニズム
4	摂食嚥下障害の検査・評価
5	摂食嚥下障害の治療・訓練
6	訓練実施上の注意点
7	基礎知識のまとめ
8	摂食嚥下の5期モデルとプロセスモデル
9	摂食嚥下の5期モデルとプロセスモデル
10	摂食嚥下のスクリーニング検査
11	摂食嚥下のスクリーニング検査
12	外科的治療
13	間接的嚥下訓練の理論的背景
14	間接的嚥下訓練の理論的背景
15	間接的嚥下訓練の実践
16	間接的嚥下訓練の実践
17	直接的嚥下訓練の理論的背景
18	直接的嚥下訓練の理論的背景
19	直接的嚥下訓練の実践
20	直接的嚥下訓練の実践
21	リハビリテーション実施計画書の記入
22	リハビリテーション実施計画書の説明方法
23	家族向け資料の作成方法
24	段階的摂食訓練の実践
25	段階的摂食訓練の注意事項
26	退院時家族指導の作成
27	地域での言語聴覚士の役割

28	まとめ
29	まとめ
30	まとめ
評価方法	終講試験点数（100％）に基づき評定する
教科書	言語聴覚士テキスト第3版．医歯薬出版，東京，2018 言語聴覚士ドリルプラス「摂食嚥下」。
参考書	適宜資料を配布する
備 考	理論の理解にとどまらず、安全管理に徹して訓練を实践できるまでを目指す。

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	聴覚障害学Ⅱ			担当講師	高畠麻央		
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1単位	時間	30時間	学年	2年次	学期	前期
概要	聴覚領域における最も深刻な問題は、難聴によるコミュニケーションや社会参加の問題である。その予防と治療、改善のためにリハビリテーション職は何を行えばよいかについて、症例や補聴器機種の操作・演習を通してその支援法を具体的に学ぶ。						
到達目標	1. 小児難聴の特徴、評価法、補聴療育計画の立案等について理解できる。 2. 成人難聴の特徴、評価法、聴覚リハビリテーション計画の立案等について理解できる。 3. 補聴器の役割、構造、周波数特性の測定、評価、調整等の基本を理解することができる。 4. 人工聴覚器（人工内耳、人工中耳）の仕組みと適応について理解することができる。 5. 耳鼻咽喉科における難聴診療の流れについて理解し、患者や家族への説明と指導ができる。 6. 基本的な聴力検査法についての技術を習得することができる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	難聴診療の現在						
2	加齢性難聴と聴覚リハビリテーション						
3	成人難聴診療の流れ						
4	新生児聴覚スクリーニング						
5	新生児聴覚スクリーニング後の対応						
6	補聴器の選択						
7	補聴器の規格と音響特性						
8	補聴器のフィッティング						
9	補聴器適合検査						
10	人工聴覚器 1						
11	人工聴覚器 2						
12	人工聴覚器 3						
13	人工聴覚器 4						
14	人工内耳の調整						
15	耳科関連疾患						
評価方法	終講試験100%						
教科書	・ 標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版 医学書院 ・ 聴覚検査の実際 改定4版 南山堂 ・ 補聴器フィッティングの適用の考え方 診断と治療社						
参考書							
備考	講義資料と教科書・参考書を読み、予習復習を行うこと。随時課題を出すので、必ず提出すること。						

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	聴覚障害学Ⅲ			担当講師	高畠麻央		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	補聴器・人工内耳についての知識を習得する。						
到達目標	1. 補聴器の基本的機能と基本的形態について理解する。 2. 実習を主体に補聴器の操作・性能測定を理解する。 3. 補聴器の音響学について理解する。 4. 補聴器の適応と適合について理解する。 5. 補聴器フィッティング法について理解する。 6. 人工内耳のしくみと手術について理解する。 7. 人工内耳の適応基準について理解する。 8. 人工内耳のマッピング、リハビリテーションについて理解する。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	聴覚障害と補聴器						
2	聴覚障害と補聴器						
3	補聴器の歴史						
4	補聴器の歴史						
5	補聴器の種類						
6	補聴器の種類						
7	補聴器適合						
8	補聴器適合						
9	補聴器適合						
10	補聴器演習						
11	補聴器演習						
12	補聴器演習						
13	補聴器演習						
14	人工内耳						
15	人工内耳						
評価方法	レポート課題（100％）により学修成果を評定する						
教科書	補聴器フィッティングの適用の考え方 診断と治療社						
参考書							
備 考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	聴覚障害学Ⅳ			担当講師	高畠 麻央、岡崎 宏		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	成人と小児の聴覚検査について理解し、実施手順、検査結果の読み方を習得する。 また、耳鼻咽喉科の診療の流れに基づいた臨床法について学ぶ。						
到達目標	1. 成人の聴覚検査について理解し、結果を患者や家族に説明できる。 2. 小児の聴覚検査について理解し、結果を保護者に説明できる。 3. めまいの検査などを含め、耳鼻咽喉科における難聴診療の実際について理解できる。 4. 新しい補聴器機や日本工業規格について理解し、患者に応じたりハビリテーションを考慮できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	成人の聴覚検査の実際
2	成人の聴覚検査の実際
3	成人の聴覚検査の実際
4	成人の聴覚検査の実際
5	成人の聴覚検査の実際
6	成人の聴覚検査の実際
7	成人の聴覚検査の実際
8	成人の聴覚検査の実際
9	小児の聴覚検査の実際
10	小児の聴覚検査の実際
11	小児の聴覚検査の実際
12	小児の聴覚検査の実際
13	小児の聴覚検査の実際
14	小児の聴覚検査の実際
15	小児の聴覚検査の実際
16	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
17	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
18	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
19	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
20	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
21	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
22	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
23	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
24	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
25	聴覚障害の評価法と聴覚リハビリテーション
26	聴覚器の構造・機能・病態
27	聴覚器の構造・機能・病態

28	聴覚器の構造・機能・病態
29	聴覚器の構造・機能・病態
30	聴覚器の構造・機能・病態
評価方法	終講試験（100％）により判定する
教科書	聴覚検査の実際 南山堂、 聴覚障害学 医学書院、 言語聴覚士ドリルプラス聴覚障害 診断と治療社
参考書	講義資料を適宜配布する
備考	国家試験出題基準に準じた学習を行う また、人工内耳・人工中耳、めまいについても学習を深める。

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	臨床実習Ⅰ			担当講師	言語聴覚療法学科教員、臨床実習指導者		
分野	専門	授業方法	実習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	4単位	時間	160時間	学年	2年次	学期	後期
概要	これまでに学校で学んだ知識を実践に結び付け、言語聴覚士に必要な知識、技術、資質を磨くことを目的とする。他者からの助言、指導と評価を受けることで自分の臨床能力を向上させることを目指す。						
到達目標	・誰に対しても（患者、家族、スタッフ）笑顔で挨拶が出来る ・医療従事者としての身だしなみが整っている ・社会的・基本的態度（体調管理、時間の厳守、報告・連絡・相談等）が身についている ・実習期間中、検査・訓練の妨げとならないように観察が出来る ・実習全体を通して積極的な態度で臨むことが出来る ・観察記録等提出物が滞りなく提出出来る ・指導された内容を理解し、自ら修正出来る ・問題を把握するために必要な情報を収集することが出来る ・面接・スクリーニングを適切に行うことが出来る ・症例に応じて適切な検査を選択することが出来る ・定められた手順に沿って検査がスムーズに施行することが出来る ・リスクを考慮し、検査を行うことが出来る ・検査結果から症例の全体像を把握することが出来る ・症例の状態に応じた問題点を抽出することが出来る ・その問題点に即した訓練目標を設定することが出来る ・その問題点・目標に即した訓練プログラムを立案することが出来る ・状況に応じたコミュニケーション態度及び適切な言葉遣いが出来る ・観察において必要な内容を適切な用語を用いて表現することが出来る ・報告において形式が整っており必要な内容をまとめることが出来る ・報告において適切な用語と表現を用いて自分の意見を述べる事が出来る						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
	160時間の実習施設内での実習で構成される。 実習施設において臨床実習指導者のもと、1症例を受け持つ。 受け持ったケースに対し言語聴覚療法診断を実施しながら上記の到達目標の達成を目指す。 目標達成に至らない場合は、臨床実習指導者よりフィードバック及び実技指導を受ける。						
評価方法	実習指導者が各項目を最終評価時に優・良・可・不可の4段階で評定案を作成し、その案をもとに総合的な見地から学校が評定し単位の認定を行う。						
教科書							
参考書							
備考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	臨床実習Ⅱ			担当講師	言語聴覚療法学科教員、臨床実習指導者		
分野	専門	授業方法	実習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	8単位	時間	320時間	学年	3年次	学期	後期
概要	臨床実習指導者のもと、検査・測定による評価、問題点把握、目標設定、訓練計画立案、多職種間カンファレンス、説明と同意、訓練の実施、訓練結果の検証までの一連のプロセスを学習する。臨床業務に必要な、リスク管理、文書作成、報告を実践する。						
到達目標	1. 誰に対しても（患者、家族、スタッフ）笑顔で挨拶が出来ている 2. 社会的・基本的態度（体調管理、時間の厳守、報告・連絡・相談等）が身についている 3. 実習全体を通して積極的な態度で臨むことが出来る 4. 観察記録等提出物が滞りなく提出出来ている 5. 指導された内容を理解し、自ら修正出来ている 6. 問題を把握するために必要な情報を収集することが出来る 7. 面接・検査等において、適切な検査を選択し、実施出来る 8. 定められた手順に沿って検査をスムーズに施行することが出来る 9. 検査結果から症例の全体像を把握することが出来る 10. 症例の状態に応じた問題点を抽出し、それに則した訓練目標を設定することが出来る 11. その問題点・目標に即した訓練プログラムを立案することが出来る 12. 立案したプログラムを適切に実施出来る 13. 症例の反応にあわせて柔軟な対応が出来る 14. 訓練時間を遵守し、また適切な訓練難易度に調整出来る 15. 症例が意欲的に訓練に臨めるように工夫することが出来る 16. リスクを考慮し、検査・訓練を行うことが出来る 17. 状況に応じたコミュニケーション態度及び適切な言葉遣いが出来る 18. 記録において必要な内容を適切な用語を用いて表現することが出来る 19. 報告において形式を整えて必要な内容をまとめることが出来る 20. 報告において適切な用語と表現を用いて自分の意見を述べる事が出来る						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
	320時間の実習施設内での実習で構成される。 実習施設において臨床実習指導者のもと、対象者に対する言語聴覚療法について見学・一部実施を行い、上記の到達目標の達成を目指す。 目標達成に至らない場合は、臨床実習指導者よりフィードバック及び実技指導を受ける。						
評価方法	事前評価での知識面の確認、実習時の態度、事後評価での技能面の確認を行い総合的に評価（100％）						
教科書							
参考書	各講義で使用した言語聴覚療法関連書籍						
備考							